



トリプル とらぶる プリンセス

小説 斐芝嘉和

挿絵 ハレノチアメ

立ち読み版

第一章	鳴宮の三姫	006
第二章	東方の流儀	056
第三章	真打ち登場！	090
第四章	姫たちの挑戦	130
第五章	姫たちの挑戦（その2）	167
第六章	リオン姫の秘め事	210
エピソード		254

登場人物紹介

Characters



エンマ・カラシュニコバ

長い歴史と文化を誇るオクトラル王国からやってきた王女。小柄で金髪の可愛い姿だが、プライドが高く負けん気の強い性格。



リオン・ヴァーミタイガー

デバルド王国の姫。魔術と性技を得意とする小悪魔的な性格で、エンマとはライバル(?) 関係にある。



ミオ・ムーラン

傭兵産業で勢力を拡大してきたムーラン王国出身の武闘派王女。一見、冷静沈着な美女。しかし、ベッドで相対すると……？

ティック・シュバルツ

婚姻外交により大きな国力を保つ、シュバルツ皇国の第三皇子。

「白くなるほど伸びきっているのに、処女膜以外は裂けていないのだな」

「ッ!? ちよつと待て、待つじゃ、殿下ッ! その不埒な姫どもを退がらせよ!」

二姫の不躑な視線に気づいたエンマ姫が、皇子の胸の下で慌てて藻掻き、叫んだ。

もちろん、いまの皇子にそんな余裕はまったくない。

壺口を越えた亀頭は狭い処女腔洞の半ば、くの字に折れた肉の関所で、再び足踏みをしていて。力一杯突けばすぐに通れるだろうが、すでに破瓜の痛みに呻いているエンマ姫を、これ以上苦しめたくない。かといって――。

(あ、熱い……それに、し、締まるッ!)

生まれて初めて男を受け入れた小柄な姫の肉穴は、予想以上にきつかった。熱い愛液が潤滑液となり、なんとか動かせるが、繊細な粘膜は限界まで伸びきり、張り詰め――昂る男根をギョツギョツと締めつけてくる。

痛いではなく、気持ちイイ。

エンマ姫を苦しめたくないから必死に腰を留めているが、それももう限界だった。

「む、無理です、もう無理……」

「無理でも、せよつ! 妾と殿下の交合を見られておるのじゃ……ふあッ!! く……あ、あつ!! あああ、う、うぐう……ッ!!」

ぐ、ぐ――ぐちゅちゅつ!

体重をかけて押し込んだ途端、雄々しく張り出した亀頭のエラが媚肉の関所を潜り抜け

た。転瞬、猛々しく怒張した肉槍が処女膣洞を一気に貫き通す。

亀頭の尖端が、ヌルヌルプリプリした膣奥に突き当たる。

膣洞の曲がった箇所は淫茎の半ば、色を失うほどに伸びきった壺口は淫棒のつけ根を、温かくぬめる心地よさで締めつけてくる。

「く……ううッ！」

暴発しそうな衝動を必死にこらえる皇子の下で、

「あ、あ……ああ、ああ……」

感嘆のような嗚咽のような、上擦る吐息をこぼすエンマ姫。

「か……感じ、る……で、殿下のモノが……わ、妾の……胎内、に……こんなに深く、こんなに奥、まで……」

「はい、入っています……ああ、私も感じます。姫様の熱いヌルヌルに、わ、私の……ペニス……しっかり包まれて、おり、ます……」

生まれて初めて男を受け入れ、おっかなびっくり痙攣する膣粘膜。

細かな襞はまだ薄く、ほとんど蠕動ぜんどうすることもなく、亀頭やカリ首に遠慮がちに貼りついてくるだけだが——男根に密着したエンマ姫の粘膜から、姫の鼓動がトクントクンと伝わってくる。姫の体温がジワ、ジワ、と染み込んでくる。

滲む愛液が皇子の分身を包み、蕩けるとろような快感が徐々に徐々に増していく。強張っていた処女粘膜が次第に解れていく様子を、滾る亀頭にハッキリ感じる。エラやカリ首、淫

茎なども、少しずつ馴染み始めたエンマ姫の微妙な変化をありありと体感する。

温かく柔らかな心地よさに包まれた皇子がたまらず頬を弛めると、

「そんなに気持ちイイ……のかや？」

胸板に押し潰されている幼気な美姫は、拗ねたような顔になった。

「妾は、辛い……痛くて、死にそうじゃ……」

「えっ!? あ、す、済みません……」

咄嗟に謝る皇子だが、肉棒の心地よさは隠しきれず、頬は弛んだままだ。

「殿下は、狡い……そんなに幸せそうな顔を見せられたら、妾はもう、イヤじゃと言えないではないか……」

拗ねていた頬がふと弛み、慈母の微笑みに変わった。

怪訝な表情になる皇子を見上げ、

「我慢、する……殿下の好きなように、せよ……」

苦痛を隠し、照れ照れに照れて、ポソポソと囁く。

「え、エンマ姫……」

小柄な美姫に覆い被さった皇子の胸に、熱い衝動が込み上げてきた。

こんなに幼気なのに、必死に我慢している——自分だけ気持ちよくなっているのに許してくれた。己の苦しみを懸命にこらえ、さらに私を悦ばせようとしてくれている——。

なんと健気な姫なのだろう。

なんと優しい姫なのだろう。

（私の正妻は、この姫……かも……）

まだ射精もしていないのに、早くも心を決めかけた——そのとき。

「ンもう、焦れたいわね！ 私が助けてあげるから、さっさと進めなさいよ！」

皇子の背後でリオン姫がむくれ、素早く呪文を唱えた。

「え？ あ？」

一瞬、なにが起きたのか分からなかった皇子だが——変化はエンマ姫に現れた。

辛そうに歪んでいた頬にふと戸惑いが浮かび、すぐに驚きが変わって——。

「あ……うう、あは……」

恍惚の微笑みが咲きこぼれたのだ。

涙に濡れた瞳がたちまち焦点を失い、ゆら、ゆら、と揺れ始める。唇は弛み、仔犬のような甘え声を漏らして——シーツを掴んでいた両手がふらふらと持ち上がり、皇子の首にしがみつく。左右に広げられていた両脚が蛇のようにくねり、皇子の腰に絡みつく。

「な、なにをしたのですか、リオン姫ッ!？」

「安心して。破瓜の痛みをキャンセルしただけ。オマケで傷も癒してあげたから、思いっきり激しく動いても大丈夫よ」

赤毛の姫の得意げな言葉が終わるより早く——ぐちゅっと、エンマ姫の膣洞が妖しく蠢き始めた。破瓜の激痛が消え、強張りが解けたのだ。

深々と潜り込んでいる牡肉に密着していた膾粘膜が、新たな蜜を滲ませて小刻みに震え始める。初めはバラバラだった震えが、次第に連動し、方向性を得て――。

「う……おっ!? ペ、ペニスが……す、す、吸い込まれ……るっ!?」

ギユチ、ギユチ、ギユチ――蜜まみれのヒダヒダがリズミカルに連動し、根元まで咥え込んだ牡肉を力強くしゃぶり始めた。

幾千、幾万もの小さな舌の群に、肉棹の側面や裏筋、カリ首、エラなどを、ピチヨピチヨと舐めまくられているような――まるで、生まれて初めて受け入れた牡肉の熱さ、硬さ、太さ、味などを、一気に確かめようとしているような食欲さだ。淫茎のあらゆる場所に小さなキスが雨あられと降り注ぎ、

「殿下、殿下……殿下あっ!」

胸の下で蕩けた笑みを浮かべた幼気な美姫が、柔らかな頬をしきりに擦り寄せながら、鼻にかかった甘え声をこぼす。

皇子の首にしがみついていた腕は、もっと掴みやすい場所を求めて下がり、脇を潜って、夏衣の背を鷺掴みに。皇子の腰に巻きついた脚にも力がこもり、なかなか動き出さない剛直に焦れたのか、小さな尻を自分から振り始める。

「妾は、変、変じゃ……頭がクラクラして、身体がふわふわして……あ、熱い川が、身体
の芯を流れているような……お、お願いじゃ、ギユツとしてたもれ! 強く、強く強く、
抱き締めてたもれ!」

「こ、こう……ですか？」

「違うッ！ もっと、もっともっと……もっと、ギユウツとッ！」

急かされた皇子は本能に命じられるまま、胸に顔を埋めている小柄な美姫を抱き締めた——といつても、背の高さが違いすぎるから、小さな頭を抱え込むような形に。

（あ……いい匂い……）

頬に当たる可愛い旋毛は、噴き出す香汗にしっとり潤んでいた。緩く波打つしなやかな金髪の一筋一筋にも、エンマ姫の悦びが流れ込んでいるのか——濡れたような輝きを増し、花芯と同じ甘酸っぱい匂いを放つ。皇子の頬をくすぐり、指に絡まり——。

「ふぁ？ う……くうん、くうん！」

髪を撫でられた小柄な姫が、仔犬のように鳴いた。

膺の悦びにわけが分からなくなっているのか、喘ぐ唇が皇子の胸に触れる。ちゅば、ちゅば、と微かな水音を立てて、熱烈なキスを繰り返す。

「殿下、殿下……殿下あつ！ 早う……早う頼む、早う、早う……」

「な、なにをです？」

「し……知らぬッ！ とにかく早う、頼むうっ！」

甘え声で拗ねたエンマ姫が、皇子の身体にしがみついたまま、腰をクイッククイッと動かした。動かすつもりはなく——というより、動かしている自覚もないのか。

「は、腹の中で……皇子のモノ、が……あ、あ……ああつ！ ゴリゴリ、しておる……う

う、くう、ううっ！ お腹が、お腹が……と、と、蕩け……るう！」

譫言うわごとのように口走りながらふわふわと微笑むエンマ姫が、皇子の胸の下で身体を振り、皇子の重みを受けている腰をしきりに揺らす。奥の奥まで潜り込んだ淫棒がグチュ、ニチュ、と膣壁を磨り潰すたび、

「にやふッ!! あにヤン……あ、ふぁ……」

幼気な頬が艶めかしく弛み、淫らに蕩けていく。

「本当に分からないの、皇子様？ エンマちゃんは、早く動いてって言ってるのよ」

「そ、そうなんですか？」

ほんの少し前まで破瓜の痛みに呻いていたのに——リオン姫の魔法の効果か。破瓜の痛みを消したことで、膣穴が本来的に有している性感帯が一気に開花したらしい。

もちろん、皇子としても否やはない。

むしろ、動きたくて動きたくてウズウズしていたところだ。

「う……う、動き……ますっ！」

宣言と同時に、カクン、と腰を振る皇子。

「あうっ!!」

すでに深々と潜り込んでいた男根に膣奥えぐを抉られ、寝具に埋もれたエンマ姫の薄い背筋が弾けるように反り返った。

同時にギュチュッと締まる膣穴。

根元から筒先までに貼りついていた熱いヌルヌルが一気に絞られて、蜜まみれのヒダヒダが皇子の分身を小刻みに、強く激しいやらしく舐め回す。

「く、お、おとおっ！」

あまりの悦びに、皇子が吼えた。

（もうダメ、もう止まらないッ！）

閃く悦びを追い求め、腰が激しく前後する。

太すぎる剛直に挟られた膣穴が、ぐっぽ、ぐっぽ、とリズムカルに鳴る。

「あふっ!! にやう……ああっ!! あああっ!!」

膣奥を突きまくられ、何度も何度も反り返るエンマ姫。

突き揺すられた子宮に快感が爆発するのか、幼気な頬が蕩け、微笑む瞳が法悦の涙に濡れた。薄ピンク色のドレスから覗く細い肩が、乱れた呼吸に合わせて大きく上下に。

汗を滲ませしっとり輝く細い鎖骨。

反り返って震える、華奢な喉。

狭い膣洞は突けば突くほど潤みを増し、妖しい蠢きを強めていく。

「そ、そんな……ダメ、らめ……激し、しゅぎいっ！」

可愛い眉根がふわ、ふわ、と開き、弛み——刻み込まれる快感に応じ、熱い膣粘膜が振れ、絞る。猛る牡肉を締めつけ、しゃぶり立てて、

「うう、くうう……うううっ！」

呻く皇子の尿道から熱い精液を吸い出そうとする。

「姫、姫……エンマ姫っ！　どうか、どうかお許しください……どうか、どうか！」

「にやう、あ、にやあつ!?　にやにを!?　にやにを、許すのじゃッ!?」

「姫の中に、出す……ことをッ！　お願いです、早く、早く……早くうッ！」

「ゆ……許すッ！　らしえ、らしえ……妾のにやかに、らしええええ——ッ！」

柔らかな頬を赤らめたエンマ姫が縛れる舌で叫んだ瞬間、狭い膣洞が鋭く捻れた。

根元から筒先まで、一気に絞り上げられる男根。

「い、い……イき、まああすっ！」

皇子が叫び、一際深く突き込んで——びゅくっ！

びゅくくっ！　どびゅびゅっ！

膣奥に触れたペニスの先から、煮え滾った精液が勢いよく迸った。

「ひあっ!?　あ、あ……ああああっ！」

胎内の深い部分をねつとりとした熱に叩かれ、雷に打たれたように反り返るエンマ姫。

皇子の腰に絡みついた両脚がプルル！　ピククッ！　と震え——。

皇子の夏衣を掴んだ指先が真っ白になるほど力み——。

びゅるっ！　びゅるる……ぷっしやあああつ！

絶頂に達し、意識が遠退いた瞬間、深々と貫かれた膣穴の傍から黄金色の小水が噴き出し始めた。



握り方、しごき方を巧みに変化させながら、紅髪の小悪魔がいよいよ本領を発揮し始めた。実に愉しように、とても嬉しように——しなやかな指を巻きつけてカリ首を絞ったり、しつとりとした掌で亀頭を撫で撫でしたり。

巧みなのは手技だけではない。長く艶やかなツインテールを揺らしつつ、四つん這いになった細い身体をさりげなくくねらせたり、うしろヘクイッと突き上げた小振りな尻を右へ左へ打ち振ったりして、細く小柄な全身を使つて淫らな気配を演出する。

本当に愉しそうで、本当に嬉しそうで——性に対する禁忌感など一切感じていないような、天真爛漫な姿。これで硬くならない男など、きつとひとりもないだろう。

あれほど小さかった皇子のペニスも、たちまち長さと太さを得て、紅く輝く亀頭を鎌首のようにもたげながら雄々しく反り返った。青筋を立てて黒光りする肉茎にいったいなにを思い出したのか、椅子から腰を浮かせて喰い入るようにつめていたエンマ姫とミオ姫が、ふたり同時にゴクツと生唾を呑み込む。

「お、おぉ……そうじゃ、コレじゃ。コレこそ、先日ミオ姫を悦ばせたペニスじゃ！」
「エンマのアソコに挿入られたのも、コレだぞ。いまさらながらに思うが……こんなに太くて凶悪そうな肉槍が、よく入ったもんだ……」

——猛る男根に魅了され、二姫とも、自分がなにを口走っているのかよく分かっていないようだ。目は見開かれ、頬は赤らみ——これほど真剣な目で見つめられると、皇子としても嬉しいような恥ずかしいような、照れ臭くも誇らしい気分になってしまう。

「とまあ、ざっとこんなもんだよ」

感心しきりの二姫に向かい、薄い胸を得意げに反らせてみせるリオン姫。

「このまま皇子様にしてもらうのも悪くないけど、今宵の私はふたりの先生だから、もうちょっとテクニックを披露しちゃうかな」

「なに？ まだなにかあるのかや？」

「すでにすっかり大きくなってるじゃないか。これ以上、いったいなにを……」

「うふふ……それはね、こういうことよ！」

言いさしたりオン姫がいきなり首を傾け——れちよっ！

「はひゅっ!!」

予告もなしに亀頭を舐められた皇子が、熱い快感の不意打ちにおかしな声を漏らし、ビクッと首を竦めた。驚いたのは見学中の二姫も同じで——ふたりとも目を真ん丸に見開き、口をポカンと開いて、すぐには言葉も出ない様子。

「あら？ うふふ、どうしたの？ エンマちゃんもミオちゃんも、変な顔しちゃって」

「い、いや……というかその、いやだってソレは……」

「き……汚い、だろう？」

愕然としている二姫の姿に気分をよくしたりオン姫は、ことさら見せつけるように首を傾けた。皇子の腹にツインテールを渦巻かせ、皇子の腰に柔らかな頬を預けて——雄々しく屹立した赤黒い淫肉の側面を、伸ばして広げたしなやかな舌でれちよ、れちよ、とこれ

見よがしに舐め上げてみせる。

「汚くなんてないわ、ンちゅ、ちゅ……だって皇子様、閨に来る前にちゃんと沐浴してるもの。皇子様が私たちに氣を使つて身嗜みみだしなを整えてくれたのだから、私たちも……ンちゅ、ちゅ……ぷは。皇子様のために全身全霊を用いてお応えしないと……」

しゃべりながら舐めながら、リオン姫自身も興奮し始めたのか——だらしく開いた皇子の脚の間に小さな身体を横たえて、しきりに首を伸ばしたり、右へ左へ傾けたりしつつ、さまざまな角度からいろいろな場所をレロレロピチュピチュパチュパチュツツ。

使っているのは舌や唇だけではない。白い指先で陰囊を弄んだり、滑らかな額を亀頭にさりげなく擦りつけたり、強張る裏筋に小さな鼻を押しつけたり、己の唾液でヌラヌラ輝くカリ首に熱い吐息をフツと吹きかけたり——と、絶妙な小技も織り交ぜていく。

（こ、こ……これはっ!!）

未知なる快感に息を呑み、めくるめく陶酔に喘ぐティック皇子。

熱く潤んだ膺にギユンギユン締め上げられる恍惚感とはまるで違うが、しかし、氣が遠くなるほど心地よい。舐められた場所、吸われた場所の快感と、刺戟されていない部分のもどかしさのギャップが、肉の悦びを鮮明に際立たせているのか——リオン姫のようにあどけない面立ちの美少女が、さも嬉しそうに、むくつき男根と無邪氣に戯れているという、視覚的效果もあるだろう。

「くう、ぬうう……浅ましい妖術師が、よもやそこまでの覚悟でおったとは……確かに、

妾はまだ、すべてを捧げきつておらぬ……」

「か、顔中を、あんなにべちよべちよにして……く、くそっ！ 負けた！ なんだか知らないが、いまのリオンには勝てる気がしない！」

ベッドの傍で悔しがる二姫を置き去りにして、赤毛の小悪魔はさらに舌技を披露する。

唾液まみれになった男根を滑らかな額と柔らかな頬で押し退けながら、熱を帯びてデロ
ンと伸びた陰囊を——アモツ！

「ふわっ!? あ、ああ……!」

咥え込んだ珠をムチュムチュしやぶって皇子を悦ばせたあと、今度は尖らせた舌先を糸
が縋れたような裏筋に添える。チロチロと小刻みに左右に揺らしながら、肉棒のつけ根か
ら尖端へゆっくりゆっくり舐め上げて——柔らかな頬をほんのりと紅潮させ、円らかな瞳を
猫のように細めて、まるで酔っているような表情。ときおり上目遣いに皇子の顔色を窺い、
自分の舌が産みつけている快感を確かめては、自信と誇りを深めていく。

「ぬ、ぬう……なんと巧みな……ン？ なんじゃミオ姫？」

「ほら、あれ……皇子の顔……」

「ん？ ぬっ!? な、なな、ななな……ッ!?」

絶句するエンマ姫の気配に、ハッと我に返る皇子。幼気な美姫の絶妙な舌技があまりに
も気持ちよすぎて、いつの間にか朦朧^{もうろう}となっていたのだ。

慌てて頬を引き締めようとしたのだが——締まらない。頭がクラクラしっぱなしで、恍

惚に弛んだ頬には涎が垂れ、

「ちょ、ちよつと待つて……待つてください、リオン姫ッ！」

叫ぶ声も弱々しく揺れる。

「ンぷは。どうしたの、皇子様？」

「き、気持ちよすぎ、ですっ！ わ、私は、もう、もう……ほわっ!!」

すべてを言い終わる前に、熱くヌチャヌチャした感触に敏感な亀頭に包み込まれた。淫靡に微笑む小悪魔が、小さな口を目一杯開き、真つ赤な肉塊をアモツと啞え込んだのだ。

爆発寸前の牡肉に、ねっちよりとまとわりついてくる美少女の口唇粘膜。

鋼のように強張った裏筋に、しなやかな舌が密着してくる。

（な……なんだ、これっ!! 本当に口……なのか!!）

踏んだ場数が半端ないティック皇子は、当然口唇奉仕も体験済みだ。しかし、記憶にある熟女の口腔は強く強く吸い立てるだけで、密着感は膣よりも遥かに淡く、正直あまりよくなかった。

だが、これは——プリプリとした瑞々しい美姫の舌が、狭い口腔の中で巧みにくねる。裏筋にネチャつきながら側面へ這い進み、やがて亀頭の上面に舌の裏側のヌルヌルが波打ちながら貼りついて——。

膣の快感は淫棒全体にヌッチョリと生じるが、リオン姫のフェラチオは蕩けそうな場所とそうでない場所のギャップが鮮烈で、悦ばせられながら同時に焦らされているという、



気持ちよくもどかしい、なんとも不思議な快感だった。

舌だけでなく唇も、強張る淫茎にいやらしく絡みついてくる。半ば辺りをムニムニと甘噛みされていたかと思うと、ツインテールを揺らした小柄な美姫が童顔を引いて――唾液に濡れた肉棒がズルズルと抜け出し、快楽神経が際立っているカリ首やエラが、柔らかな唇の裏側の、唾液に潤んだ温かな弾力に、絶妙な力加減で締めつけられる。

「く……うっ！」

煮え滾る衝動がペニスの芯に発し、一気に膨れ上がった。奥歯を噛み締め、額に脂汗を浮かべてなんとか抑え込むと、

「なんじゃ？ 先ほどは涎まで垂らしてだらしく呆けておったのに……今度はコメカミに青筋を立てて、顔を真っ赤にして、ギリギリ歯噛みしておるぞ」

「怒ってる……んじゃないのか。殺気が感じられない。痛みに耐えているのか？」

怪訝そうな顔をしたエンマ姫とミオ姫がベッドに上がり、苦悶する皇子の顔をさも不思議そうに、無遠慮に覗き込む。

「モふお、ちふあうふあお……ぷはっ！ 皇子様はね、射精しそうなのを必死にこらえているの。そうよね、皇子様？」

「は、はひっ！」

答える声が裏返る。少しでも気を抜くと、たちまち迸ってしまいうさだ。

精をこぼすこと自体は禁忌ではないが、他人に見られるとなれば別。特に王族は子を成

すことが使命だから、挿入の前に出してしまふのは根性が足りないと思^みなされ、咎められこそしないが軽蔑される原因にはなる。

しかも相手は、自国の歴史を鼻にかけたエンマ姫と、並の男では太刀打ちできないミオ姫だ。そんなふたりにビュクビュク射精するところを見られたら、ますます頭が上がりなくなってしまう——しかし。

「エンマちゃんもミオちゃんも、射精つて見たことある？ ないでしょ？ どんなモノがどんな勢いでお腹の中に注ぎ込まれるか、知っておいて損はないわよ」

ふたりの講師を自認するリオン姫の辞書に「容赦」という言葉はないようだ。

小さな口を目一杯に開き、涎まみれになった淫棒をアモツと咥え直して、いつそう強く激しくしゃぶり上げる。唇を窄めて肉茎を搾りつつ、小さな頭を激しく上下に。

じゅっパ！ じゅっパ！ じゅっパ！

「だ、ダメ……ダメダメ、リオン姫！ 私はもう、限界です！ こ、これ以上は、とても耐えられそうに……くっ!! あ、あ、ああっ！」

赤毛の小悪魔に弱みを見せてはいけない。

猫のように細めた目で上目遣いに顔色を窺ったリオン姫は、さらに頭を加速した。皇子の太腿をくすぐる長いツインテールが、艶やかに軽やかに跳ね躍る。

ぬちゅ、じゅちゅ、じゅるる——一往復ごとに首を捻り、微妙に角度を変えて——淫棒に埋め尽くされた狭い口腔の中では器用な舌がしなやかにくねり、淫茎の裏筋や側面に閃

く快感を産みつけてくる。滾る亀頭は一際細い喉にグッポ、グッポとはまり、抜け――。

「ああダメダメ、で、出る出る、出ちゃ……ああ、ううっ!!」

「んプハッ!」

射精する瞬間、リオン姫がパツと口を離した。

猛々しく屹立した誕まみれの男根が、姫たちの目の前に現れ、恐ろしげな青筋を立てて
いやらしくぬめり光る全体がぶるる、びくくつと震えて――びゆるるっ!

びくくつ! びゆるるっ! どびゅびゅつ!

天を突かんばかりの尖端から、煮詰められたように濃厚な白濁液が勢いよく迸った。

「くうう――ッ!」

精とともに魂まで抜け出ていくような、抗いがたい解放感。

尿道を駆け抜けていく大量の精液に勃起ペニスが内側から衝き動かされ、湧き上がる爽
快な心地よさに羞恥心が塗り潰される。

真上に噴き上がった精液のダマは、すぐに失速して皇子の腹や周囲の寝具にべちゃ、び
ちよ、ぬちよ――草いきれのような青臭さが、閨の薄闇にふわふわと漂い広がる。

(あ、あ……あああ……出ちゃっ、た……)

意識が吹き飛びそうなほどの解放感に恍惚となりながらも、耐えきれなかった恥ずかし
さに背筋が冷えた。エンマ姫やミオ姫から向けられるであろう軽蔑の視線を想像すると、
皇子の心臓は縮み上がり、胃もシクシクと痛む。

だが――。

「お、おお……すごい、な。これが、子種……なのか……」

「量もすごいが、匂いもきつい。それに……うわ、ネチャネチャだ。こんなモノが、私の腹の中に注ぎ込まれたのか……」

飛び散った白い粘液をおっかなびつくり覗き込んだり、指先に掬って弄ったりする姫たちは、まったく皇子を責めなかった。むしろ好奇心を剥き出しにして用を終えて急速に萎んでいく男根を不思議そうに見つめ、今度は私にやらせろと言いつ出しそうな表情。

「うふふ……舐めてみる？」

妖しげに微笑んだリオン姫が、皇子の腹に粘ついていた精液を細い指先で拭い取り、ギョッと目を瞠^{みは}る二姫の前で己の口へ運んで――れちよ。

「な、な……舐めおった……う、美味しいのか!？」

「毒じゃないわよ」

「どれ、私も……うげっ!! なんだコレはっ!!」

赤毛の小悪魔を真似たミオ姫が、途端に顔を歪めて呻く。

「苦いというか、しょっぱいというか……よくこんなモノを舐められるな……」

「皇子様の前でそんなこと言っちゃダメよ、ミオちゃん。それに、これこそが皇子様の匂いだし、味なんだから――」

幼気な頬に大人びた笑みを浮かべたりオン姫が、指で掬うのではなく、直接皇子の腹に

唇を押しつけて、すっかり冷えた精液をれちよ、ぴちよ、と舐め始めた。目鼻の造りは先ほどとまったく変わっていないはずなのに、赤らむ目元や弛んだ微笑みのせいなのか、仔猫のような振る舞いのせいなのか、妖艶さは三倍増し——いや、四倍増した。

「こうして舐めて、呑んで——ううん、お口の中に直接出してもらって、一滴もこぼさずにゴックンするとね。熱い塊がこう、喉をネロネロ垂れ下って、この辺りが……」

再び身体を起こして指し示したのは、控え目に膨らんだ乳房の間、乳の頂点より拳ひとつ分くらい下の、鳩尾みぞおちの辺り。

「……じんわり温かくなるのよ。そうするとね、男のヒトのエキスが全身に染み込んできたような気がして……男のヒトの匂いや味に、染め上げられていくような気がして……」

「そ、それが、どうしたというのじゃ？」

年齢は一番上なのに見た目は一番幼気なエンマ姫が、怪訝そうに眉を顰める。いや、リオン姫の言いたいことはちゃんと理解しているが、ライバルの言葉に納得してしまう自分を認めたくないのか。

その点、年齢的には一番下だが見た目は一番大人びているミオ姫は、素直だった。

「私は……分かるような気がする、な。身も心も、皇子のモノになる……私のすべてが、皇子とひとつになる……いや、もちろんそんなことは無理なんだが、そうなりたいとか、そうなれたらよいなあというか……」

「でしよでしよ？」

ミオ姫の賛同を得て、得意満面になるリオン姫。

だが、ムツと頬を膨らませるエンマ姫を除け者にする気はないらしく、

「染まるとか染まらないとかいう話とは別に、こう考えることもできると思うの」

萎みかかっている皇子のペニスを何気なく弄りながら、言葉を選んで先を続ける。

「たいていのエッチって、私たち女が皇子様たち男にしてみたらうばっかりよね。それはそれで気持ちいいから、そのこと自体には別に問題はないんだけど……でも、なんだかちよっと申し訳ないのよね」

過去に触れ合い、交歓してきた男たちを思い出しているのか、赤毛の小悪魔が皇子の脚の間で円らかな瞳を細め、遠くを見つめる。

珍しくムクムクと、皇子の胸の奥に黒い感情が湧き起こった。

（い、いや待て、これはリオン姫の手管だ……）

と思うのに、嫉妬と独占欲はどうしようもないほど膨れ上がる。

「私を気持ちよくしてくれた男のヒトに、私以上に気持ちよくなってもらいたい——なんて、いつもエッチのあとに思うわけ。で、このオチンチンから噴き出すビュクビュクは、男のヒトが気持ちよくなった証でしょ？ だからゴクンすると、実感できるの。このヒトはいま、私のお口で悦んでくれたんだなあって。味が濃ければ濃いほど、粘つきが強ければ強いほど、本当に気持ちよくなったんだなあって……」

「そ……それならば、妾も分かる……な」

赤毛の小悪魔に指示されるまま、ほんのり火照ったミオ姫の肉畝に触れ、掻き分ける。潤んだ淫唇の縁を確かめ、親指はほっそりとした茨を辿ってクリトリスに添え――。

「きゅ、ふうンッ!」

皇子に腰を抱きかかえられた四つん這いの美姫が、細い首をビクッと竦めて可愛い声を漏らした。軽く触れただけなのに秘裂に快感が炸裂したらしく――男根に密着している直腸粘膜が鋭く絞られる。シートに突っ張った細い手足が、なにかに耐えるようにプルル、ピクク、と小刻みに震える。

「感じておるのかや、ミオ姫？」

「か、感じ……るうっ！」

「ウンチの穴にオチンチンを挿入られた状態でオマ○コを弄られると、いつも以上にピンピンしちゃうでしょう？」

「ピンピン、す、るうっ！」

細い喉を反らし、長いポニーテールを打ち振りながら歓喜の声を漏らすミオ姫。

四つん這いになったその細い身体の左右に、熱っぽい目をしたエンマ姫とリオン姫がぴつたりと寄り添って――。

「あ？ あ……こ、こらっ！ 勝手にそんな……ひあっ!」

幼気な美姫たちの手指が、黒絹の東洋風ドレスの前身頃を勝手に開いた。瑞々しい美乳がぷるるんっ！と弾みながらこぼれ出し、先端に痼った乳首が閨の薄闇に赤々と輝く。

「やめ、ろ、よおっ！ いまはダメ、いまはダメなんだよお！」

「なにがダメなの？ 感じすぎちゃうから？」

悪戯っぽく微笑んだリオン姫が手を伸ばし、シーツに向けてゆさゆさと揺れている形よい乳房にそつと触れた。

「ふはっ!? あ、あうっ！」

揉まれたわけでもないのにミオ姫は顔を跳ね上げ、細い背筋を泳ぐようにくねらせた。仰向いた頬は快感に蕩け、恍惚に弛むのに、皇子のペニスを呑み込んだ尻穴はギユウ、ギユウ、と緊縮する。

「く……ううっ！」

頬を赤らめ歯を喰い縛り、暴発しそうになった射精欲求を懸命にこらえる皇子。

「感じていいのよ、ミオちゃん。ううん、感じるべきなの。だって、ミオちゃんが気持ちよくなるとお尻の穴が強く絞られて、皇子様も気持ちよくなるんだから」

「そ……そう、なの、か？」

「は、はい……リオン姫の言う通り……です」

絞り出された皇子の声に、ミオ姫は微笑みを必死にこらえているような、恥ずかしがっていることを悟られまいとしているような、複雑な表情になった。

「私の穴は……気持ちいい、か？ 皇子をちゃんと悦ばせている……のか？」

「もちろん、です……く、うう……！」

「うふふ、皇子様ったらトロトロになっちゃって……だからね、ミオちゃん。もっともつと気持ちよくしてあげる。ほら、エンマちゃんも、そっち側から」

「え？ わ、妾もするのか？」

傍らで呆然としていた幼気な姫が、突然名前を呼ばれて目を白黒させた。が、興味がなわけではけつしてなく、躊躇いがちに指を伸ばし——ぽよん、ぽよん。

小さな掌に形よい乳房を乗せて、「ほう……」と感嘆しながら上下に弾ませ始める。

「これがミオ姫の、オッパイか……思ったより硬いな。温かくて、張り詰めておる」

「やう、ああ……や、やめ、ええっ！」

羞じらい悶える大人びた美姫を間に挟み、ふたりの幼気な姫たちが、乳白色に輝く美しい丸みを小さな手で無遠慮にムニユ、ムニユ、ムニユ。

「ウンチの穴にオチンチンを突っ込まれて、気持ちよくなっているせいよ。快感の源が詰まっている感じ、と言えばいいのかな？ ちょっと指を沈めてみて」

「ぬ？ こ、こうか？」

「はうっ!? あ、あああっ！」

乳房を歪ませる細指に合わせ、嘶くように反り返るミオ姫。

真っ赤に染まった顔が跳ね上がり、揺れるポニーテールが背後の皇子の顔を掃き——男根を咥え込んだ尻穴がギュウツと窄まる。腸液にぬめる熱い直腸粘膜がグニユリグニユリと激しく蠕動する。

「く、うううつ！」

揺れ動く細い腰にしがみついた皇子は、迸りそうな精液を必死にこらえ、ゆっくり、ゆっくり、慎重に抽送し始めた。腸液にぬめる滑らかな粘膜に包まれ、力強く揉みまわられている淫棒が、蕩けそうなくらい気持ちよくてジツとしていられないのだ。

一方、ミオ姫の乳房を弄る二姫は――。

「ぬおっ!? み、見よ、妖術師！ ミオ姫の乳首が……いつそう大きくなったぞよ！」

「それだけ感じてるってことよ。それにしても……うふふ、本当にコチコチだわ」

下を向いて痼った勃起乳首を細い指先で抓み、キュッキュツと揉んだり、シュツシュツとしごいたり。

「ふにいつ!! あ、あ、ううつ！」

胸先に閃く快感に目を瞠り、四つん這いのミオ姫がビクン！ ビクン！ と痙攣する。いつも涼しげな瞳は熱っぽく潤み、不敵な笑みが似合う唇は閉じることを忘れたように半開きになり、艶めかしい吐息をこぼし――額にフツフツと浮き上がる、真珠のような汗。スツキリとした頬はホオズキのように赤らみ、桜色に火照った柔肌から濃密な牝フェロモンが立ち上り始める。

「こんなに硬くなつてると、ひよつとしたら、オッパイ出るかも……」

悪戯っぽく微笑んだりオン姫が、不意にゴロンと仰向けになった。なにをするつもりか、と驚く皇子の目の前で、ツインテールの小さな頭がミオ姫の胸の下へ潜り込み――。

「ああバカッ！ やめ……ろおっ！ 感じちゃう、感じちゃうっ！」
突然、ミオ姫がいつそう激しく悶えた。

胸の下に頭を突っ込んだ赤毛の小悪魔が、弾けんばかりに勃起した乳首を乳暈ごと口に含み、むちゅっ！ ちゅぱっ！ と卑猥な音を立てて吸い始めたのだ。

「ぬぬッ!! そんなことをしてよいのか？ ならば妾も——」

「よ、よくない、よくない……あっ!! あう、あ、ああっ！」

リオン姫とは反対側で仰向けになったエンマ姫が、もう片方の乳首を吸い始めた。

左右の乳首をチュパチュパされたミオ姫は、

「出ない出ない、そんなに吸っても……で、な、いいいっ！」

皇子の腕の中で細い腰をくねらせ、長く艶やかなポニーテールを激しく振って、狂ったように身悶える。

だが、仰向いた頬に浮かぶのは陶醉の笑み。

ギュンギュン締まる括約筋。妖しい蠕動を強め、男根を撫でまくり揉みまくり、しゃぶり立てる直腸粘膜。

淫技に長けたリオン姫の口唇は言うまでもなく巧みだが、三人の中で一番幼く見えるエンマ姫のキスは不器用さを補って余りあるほど熱烈だ。

それでなくても、妹のように可愛い二姫。

幼気な美姫たちに乳首を吸われ、チロチロ舐められると、ミオ姫の胸中にはほのかな母

性が目覚めてしまう。皇子の前で快感を産みつけられ、よがり悶えさせられているのは恥ずかしいが、しかし邪険には扱えないような――。

「も、もう……！　しょうがない、なっ！　でも、出ないぞ、出ないからな！」

照れ臭そうに微笑みながら許可を下す声が、短く途切れ、微妙に波打つ。

皇子の突き込みが次第に速く、だんだん強くなってきたのだ。

「く、う、うう――ッ！」

渦巻く快感に耐えながら、ミオ姫の細いウエストにしがみつき、心地よい肉洞の奥へ奥へと猛るペニスをねじ込む皇子。

それでいて、秘裂に触れた指先も疎かにしてはいない。

プニプニした肉畝を掻き分け、ヌルヌルした淫唇を掴み――コチコチに強張ったクリトリスを、親指の腹で撫でる。親指の爪でしごく。

「にあっ!!　あ、ううンッ！」

左右の乳首の快感と尻穴に膨れ上がる肛悦に、秘裂の悦びが混じり合った。

四肢を突つ張るミオ姫の背がしなやかに捻れ、反り返り――。

「も、もうダメ……もう、もう……なにがなんだか……分らない、よおおっ！」

涙に潤んだ声を張り上げつつ、自ら腰を振り始める。

皇子の突き込みを待てないとはかりに、細い身体を前後に揺らす。

ポニーテールを揺らし、弾ませて、駆けるように律動する。

（ああ、なんて美しいんだ……！）

四つん這いになった美姫を背後から見ているから、皇子の目に映るのはせいぜい横顔だけなのだが——法悦の涙を溜めて赤らむ目元、恍惚に弛んで輝く柔らかな頬、喘ぐ唇、溢れる吐息。

この美しい生き物を、逃したくない。

もっともつと知りたい、もっともつと感じたい——。

本能に命じられるまま、香る汗を滲ませて甘酸っぱくなつたミオ姫の白いうなじに頬擦りする。うつすらと浮き上がっている頸骨に、唇を這わせてチュパ、チュパと軽いキス。

「にやう、ああっ!? や、やだ……そんな、ところ……までえっ!?」

皇子の指先に弄られた秘裂、皇子のペニスに挟られた尻穴、胸の下で仰向いているふたりの幼姫に吸いまくられている乳首——それらの悦びが全身に伝播して、柔肌のすべてが性感帯になってしまったらしい。

「い、いけません、か?」

「い……いけなく、ない……けど、けど……ふはっ!? にやう、にやあッ! やめ、ダメ……あ、頭の中が、真っ白に……なるう!」

普段の大人びた美姫からは想像もつかないほど可憐な鳴き声を張り上げたミオ姫は、いっそう強く身体を振った。腰にしがみついている皇子を振り解こうとしているように尻を揺らし、シャツについた四肢を突っ張って、

「あああ、えあ、えあああつ！ 変になる、変になつちや、うううつ！」

舌っ足らずな声で鳴く。

ヌチュヌチュと掻き回される秘裂。

キュッキュツと磨かれる淫核。

チュパチュパと吸い立てられている左右の乳首。

そしてなにより——グッポグッポと、奥まで掻き回されている美姫の尻穴。

「やら、やらやら、やらあああつ！ 気持ちイイけろ、らめなの、らめなののおおつ！」

さまざまな場所に快感を産みつけられたミオ姫は、あまりの快感に理性を失い、幼児退行してしまったようだ。

出入りする肉棒にしごきまくられた尻穴が、甘く痺れているのだろう。奥底を突く亀頭に、子宮を激しく揺さぶられ、力強く揉み潰されているせいかもしれない。

「ゆ、許せ……ううん、許して、皇子いっ！」

「え？ な、なにをです？」

「なんれもいい……なんれもいいから、許してええっ！」

近づく絶頂に錯乱している。

赤らむ頬に大粒の涙をこぼしているのに、淫らに蕩けた恍惚の笑み。

これはこれで可愛いが、あんまり焦らしても可哀想だろう。

「ゆ、許します、ミオ姫……」

真っ赤な耳朶に唇を寄せ、上擦る声で囁いた皇子は、腕の中で振れ悶える細い腰をしつかりと抱き締め直した。

ここから先は、すべて全力。

全身全霊を込めて淫棒を引き——突く。

「はうあっ!!」

反り返るミオ姫を抱き締め、猛る獣欲を解放して、心が欲するままに突く。突く。突く。

「い、い、イクううっ! 浮く、飛ぶ……ああ、堕ちるううっ!」

弾ける肛悦に反り返るミオ姫を、胸に吸いついた二姫も追い込み始めた。

柔らかな唇を密着させ、口に含んだ乳首を強く強く吸い立てる。

唇で挟んだ乳首に舌先を添え、チロチロチロ舐めまくる。

「ひあ、う、あああっ! イイ、イイ、イい、ちく、びいっ! ビンビンするの、ピンピンしちゃうの……ふあ、あ、あああっ! お尻も……イイイイッ!」

進る声に合わせ、ミオ姫の身体がしなやかに踊る。

直腸粘膜はさらに激しく絞られ、さらに鋭く波打って——力強く律動している皇子の男根を、ギュッポ! ギュッポ! と音が立つほどしゃぶりまくる。

「あ、あっ!! あああっ!! なにか来る、来る来る……あ、熱いのが、熱いのが、ああ、ああ……ああ、ああ、ああああッにやあああ——ッ!」

ビクンッ! ビクンッ!



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快なBlogも更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!